深瀬のでくまわし

深瀬でくまわし保存会

尾口のでくまわし

文化財指定

- 昭和35年　石川県指定
- 昭和52年　国指定

保存団体

- 東二口区文弥人形浄瑠璃保存会
- 深瀬でくまわし保存会

「でくまわし」の伝承地

深瀬新町
松任駅
野町駅
松任
金沢市
医王山
手取川
美川
鶴来
加賀一の宮駅
梯川
小松駅
小松空港
360
河内
416
鳥越
大聖寺駅
8
小松市
305
吉野谷
360
笈ケ岳
北陸本線
364
東二口
手取湖
(手取川ダム)
尾口
白山スーパー林道
刈安山
北陸自動車道
157
大日山
白峰
白山
別山

「深瀬のでくまわし」のはじまり

- 文献はないが、約350年前はじめられたと伝わる。
- 深瀬にきた興業者が借金の代償として人形をおいていき、技術を伝授。
- 河岸市之助氏（慶応元年～昭和33年）伝承より

ありしひの尾口村深瀬(昭和49年)

でくまわし保存会館

深瀬の上演会

東二口の上演風景

「深瀬のでくまわし」の演目（6演目）

- 源氏烏帽子折
- 門出八島
- 大職冠
- 大江山
- 仮名手本忠臣蔵
- **熊井太郎孝行之巻（本日上演）**

大職冠

ヨイチベー

練習風景

新しい木偶

受付
深瀬のでく

でくまわしの太夫

本日、上演の演目

熊井太郎孝行之巻

初段

深瀬木偶廻し

あらすじ

- シーン1
  ごう姫は千人切りの噂をきき、牛若と確信し、乳母（あさじ）とともに五条大橋にやってきます。
  そこで千人切りを退治しに来た弁慶出会います。

あらすじ

- シーン2
  千人切りの牛若が、登場し、みつどもえの立ちまわりとなります。
  やがて、ごう姫は牛若への思いから、また弁慶も牛若に会うためにやってきたことがわかります。

あらすじ

- シーン3

　弁慶は、牛若の家来となり、ごう姫も牛若と夫婦となって、4人そろって、若宮八幡宮へ参詣に向かいました。

登場人物

①牛若

②弁慶

③ごう姫

④乳母

登場人物①

牛若

源義経　源義朝8男

一般的に五条大橋の千人りは弁慶であるが、「熊井太郎孝行之巻」では、義経が千人切りを行っている。

登場人物②

弁慶

比叡山の僧。ここでは7尺以上（約２１０センチ）もある大男。

千人切りを退治しに五条大橋にやってくる。

登場人物③

ごう姫

鎌田兵衛正清の妹。牛若にひとめ惚れし、恋い慕っている。前半、男子に変装して鎧兜姿で登場する。最終場面で、女でくにかわる。

登場人物③

ごう姫

鎌田兵衛正清の妹。牛若にひとめ惚れし、恋い慕っている。前半、男子に変装して鎧兜姿で登場する。最終場面で、女でくにかわる。

登場人物④

乳母

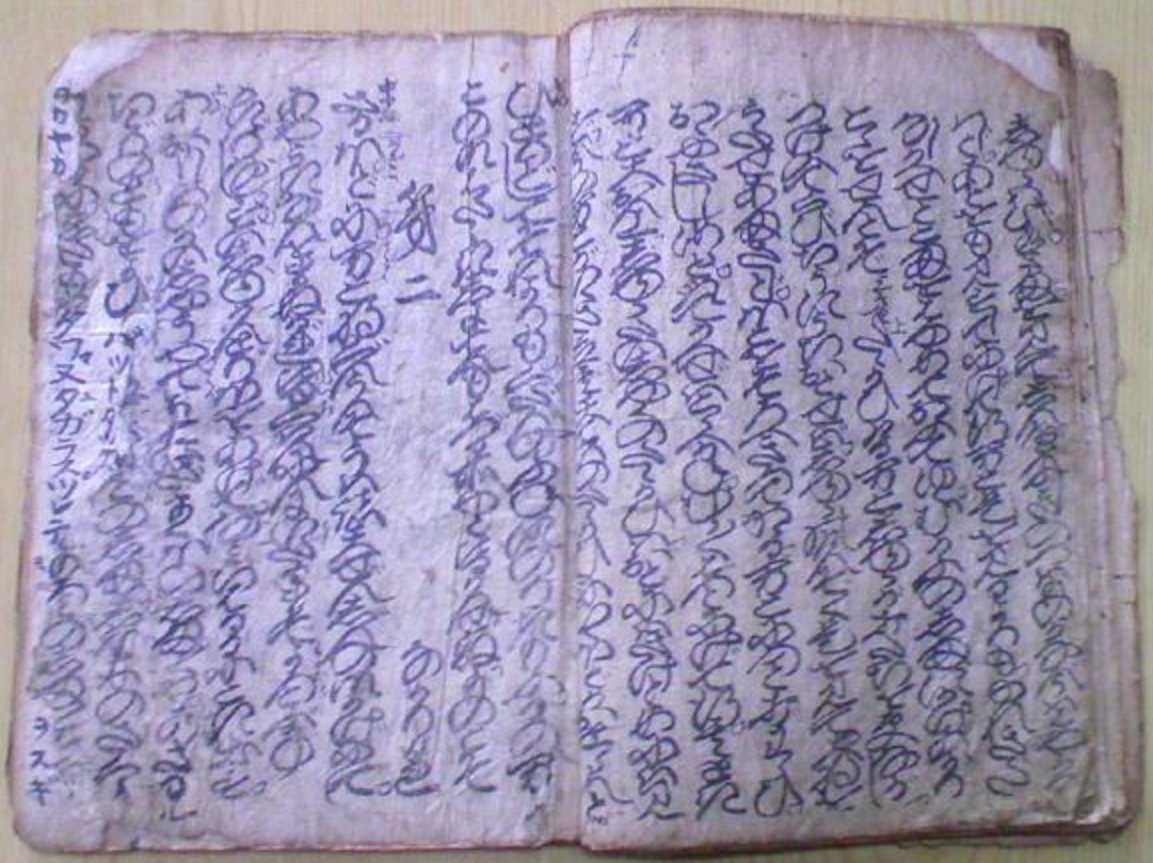
あさじ、ごう姫の乳母。ごう姫とともに鎧兜姿に変装して、五条大橋にやってくる。

登場人物④

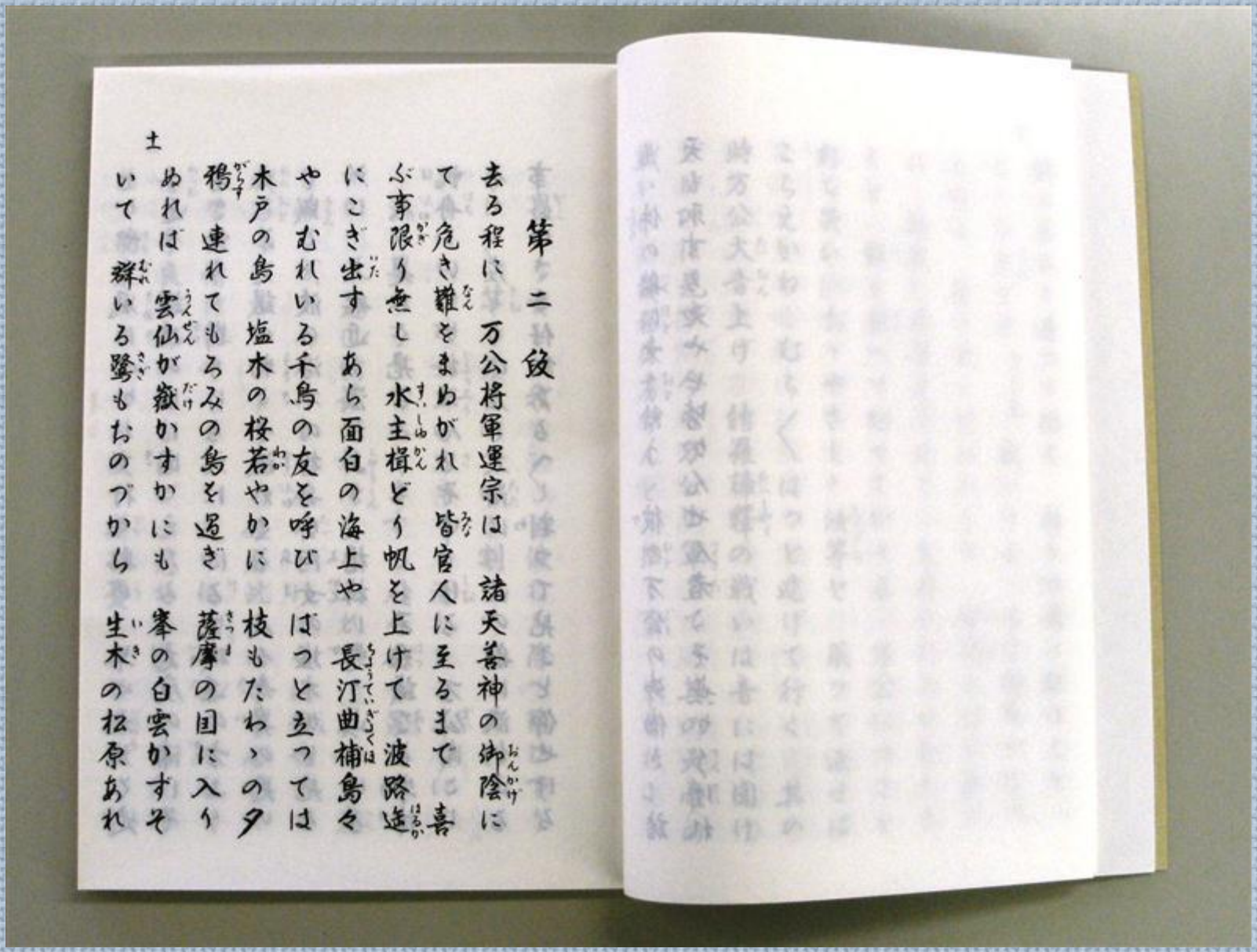
乳母

あさじ、ごう姫の乳母。ごう姫とともに鎧兜姿に変装して、五条大橋にやってくる。

高幕のなかから



くずし字で書かれた浄瑠璃本



第二段

去る程に　万公将軍運宗は　諸天善神の御陰に
て危き難をまぬがれ　皆官人に至るまで　喜
ぶ事限り無し　水主楫どり帆を上げて　波路遥
にこぎ出す　あら面白の海上や　長汀曲浦島々
やむれいる千鳥の友を呼び　ぱつと立つては
木戸の島　塩木の枝若やかに　枝もたわゝの夕
鴉　連れてもろみの島を過ぎ　薩摩の国に入り
ぬれば　雲仙が嶽かすかにも　峯の白雲かすそ
いて　辯いる鷺もおのづから　生木の松原あれ

毛筆で書かれた浄瑠璃本（平成元年、2年に作成）

大職冠

重要無形民俗文化財
尾口
深瀬のでくまわし
普及本

今回作成した浄瑠璃解説本

出世景清　初段

さてもその後、妙法蓮華経観世音菩薩、普門品第二十五は大乗八軸の骨髄、信心の行者大慈大悲の光明にあずかり奉る、観音威力ぞありがたき。

ここに平家の一族、悪七兵衛景清は西国四国の合戦に討ち死にすべき者なりしが、

「死は軽くして易し、生は重くして難し。所設命を全くして、平氏の怨敵石大将頼朝を一太刀恨み、平家の恥辱をすすがん」

と落人となり、尾張の国熱田の大宮司にいささかしるべありければ、深く忍びていたりけり。もとより大宮司は平氏重恩の人なれば、深くいたわり、一人姫に小野の姫と聞こえしを景清にめあわせ、子ども姫ともかしずき給う心ざしこそありなれ。

景清、大宮司の御前に出で、

「まことにそれがし無二の御恩志に預かり長々浪人仕り、身は朽もれ木と打ち果てん、紅顔みなき身ながらも、せめて頼朝

妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五は、大乗経典のなかでも最も重要な部分であり、その信者は多大な恩恵をいただけると言います。まことに観音の威力とはありがたいものです。

源氏と平家との間で起こった源平の戦い、それに敗れた平家の一族に、悪七兵衛景清という者がいました。彼は屋島の戦いや壇ノ浦の戦いで討ち死にしても不思議はなかったのですが、かろうじて生き延びました。そして「死ぬのは簡単だが、生きていくのは難しいものだ」と、平家のなんぼ我ら平家の敵・源頼朝に一太刀恨びや、平家一門の恥をすすいでから死のう」

と考えて落人になり、知り合いの尾張国熱田神宮の大宮司のもとに身を寄せました。もともと大宮司は平家の恩を受けていた人なので、景清を一家にもてなし、一人姫である小野姫と結婚させ、子ども姫とも区別がつかないほどと大切にいたわっていました。

ある日景清は大宮司の前に出て、

「本当に私はあなた様にこれほどまで恩志にしていただきました。長い間浪人として過ごしてきておる。まことに無一になるべき者ではありますが、せめて頼朝に一太刀恨びやでも若や父の恨みを晴らし、その前は命を捨て

でくの廻し方

①男でく

②女でく

③道びき

④攻め

⑤おどり

⑥馬

節の種類

①でくの登場

②語り合いの場面

③泣きの場面

④戦いの場面